SRID 活動報告

Newsletter No. 1～No. 530 に見る SRID の歴史

山下 道子
SRID 事務局長

SRID Newsletter は組織の会報誌として、1974 年 10 月の設立当初から、会員相互の情報交流を目的に発行されてきました。最新号の 2023 年 6 月号は No. 530 ですので、この 50 年間に毎年 10 号以上発行したことになります。初期の Newsletter を紙媒体で保管している人はごく少数と思われますが、実は紙面をコピーした電子媒体が残っていて、現在でも読むことができます。2010 年に SRID の事務所を引き払った折に、段ボールに大量に保管されていた文書を整理して電子化しました。以下に Newsletter の記事に現れた限りにおける SRID の歴史を振り返ります。

Newsletter の発行事情

私は役所を退職して 1 年後の 2005 年 4 月に SRID に入会しました。その後、依頼されて 2009 年度に事務局補佐となり、2010 年度から事務局長を務めていますので、2023 年度で 14 年目となります。就任当初からすでにグループメールが使われており、会員からいただいた原稿（ワードまたは手書き）を編集し、会員限りの月刊誌として SRID Newsletter をメールで配信していました。パソコンが普及する以前は、手書きの原稿を印刷屋に持ち込んで活字に組み、割付、校正、編集を経て印刷物を個別に会員に郵送するなど、大変な手間がかかったと聞いています。

2011 年度に藤村建夫会員の努力で SRID Journal が電子ジャーナルとして創刊され、国際開発協力の専門誌として年 2 回一般公開されるようになりました。2012 年度に山岡和純会員が IT 担当幹事に就任して以来、SRID Homepage が更新・改訂されたほか、SRID Newsletter の仕様が大幅にグレードアップされ、現在のようなプロフェッショナルな紙面が誕生しました。2021 年度には鈴木博明会員の主導で「SRID キャリア開発」が創刊されると、こちらは主として国際機関を志望する人への電子情報誌として、毎年 9 月と 3 月に発行されています。

創刊号に見る「会員の窓」

1974 年 12 月に発行された創刊号では、大来佐武郎元会長が SRID 設立に至った経緯について、海外で仕事をする日本人が増えるにしたがい、国内外の最新情報を相互に交換し、出張時にはお互いに便宜を図る、といった協力組織の必要性を痛感した、と述べています。設立総会には産官学で活躍する 21 名の精鋭が参集し、技術移転を始め

とする国際開発問題について、それぞれの立場から意見を表明しました。1975 年度予算の収入は、会費収入が正会員 48 万円（40 名）、賛助会員 50 万円（5 社）のほか、寄付金 5 万円の計 103 万円。支出は、アルバイト賃金（60 万円）に次いで、Newsletter・住所録の印刷代（29 万円）、郵便代・諸経費（10 万円）を含めて、計 99 万円でした。「総会参加者は多彩な顔ぶれ」和田正武（1974 年 12 月号 No.1）

Newsletter の記事を見ると、1 面には会員による政治、経済、技術、開発問題などに関する解説・論評が掲載されています。これらは今では SRID Journal がカバーしているほか、Newsletter の「自論公論」で論じられています。2～3 面には自己紹介、職場紹介、出張報告、図書紹介などが目につきます。4 面の「会員の窓」と称するコラムには、会員が海外出張する度に「会員往来」として出張先と用務が記載されます。また、会員が入会すると「新入会員紹介」として、入会者の職場、肩書、職場の住所、連絡先が記載されます。「会員異動」の場合も同じです。会員がどの組織に所属してどこで何をしているか、が最も重要な情報であったようです。

懇談会の開催

1975 年 4 月に開催された第 1 回総会では、堀内伸介元代表幹事が次のような活動計画を発表しています。①懇談会を月 2 回開催し、そのうち 1 回は年間を通じた共通テーマを掲げて、会員に発表の機会を与える。②日本の地場産業の発展過程など、途上国のレッスンとなる会員の共同研究を立ち上げる。③積極的に Newsletter を活用して、海外会員に海外の研究成果を国内会員に紹介してもらう。「第 1 回 SRID 年次総会を迎えて―海外会員の皆様へ―」堀内伸介（1975 年 5 月号 No.4）。

このように、懇談会は Newsletter と並んで最も伝統的な SRID の活動といえます。月 1～2 回のペースで懇談会が開催され、毎回 10 名前後の会員が出席しました。話題は会員による職場紹介、出張報告、帰朝報告等のほか、外部の専門家による講演もありました。2018 年度に小林文彦会員が懇談会の担当幹事になると、話題性のある講師を招き、国連フォーラム等の連絡網を通じて SRID 懇談会を公開したため、多くの非会員が懇談会と、引き続いての講師を囲むネットワーキング懇親会に参加するようになりました。その後、コロナ禍のため懇談会がオンライン開催になると、さらに参加希望者が増えて毎回 100 名を超える応募があり、現在に至っています。

地域産業研究部会の現地調査

発足したばかりの自主研究部会が調査研究プロジェクト「南部鋳物産業の発展条件」を立ち上げ、1975 年 8 月 21 日から 26 日まで岩手県の盛岡、釜石、水沢の三市を中心に現地調査を実施しました。現地調査団は調査項目別にグループを作り、県庁、市役所、鋳物工業組合、工業試験場などを訪問して情報、資料を収集する一方、実際に各種工場を見学して見聞を広めました。この現地調査については、和田正武氏が現地調査員報告「南部鋳物産業の変遷」として 1975 年 10 月号 No.11 に掲載しています。

夏期シンポジウム（合宿）

1979 年 8 月の週末に、JICA 八王子研修センターで 1 泊 2 日の合宿形式で第 1 回シンポジウムを開催し、宍戸元会長をはじめ 20 名が参加しました。事務局の報告によれば、「80 年代の国際開発」をテーマに参加者全員が発表を行い、討論する、という方式で、第 1 セッション「不確実性時代の LDC と日本の対応能力」、第 2 セッション「技術協力制度の見直しと改善、人類の幸福のためのプロジェクトの創造」、第 3 セッション「援助側・受入側の精神的ギャップの解消、巨大化・専門化する技術と職人気質」に分かれて、研究発表と討論が行われました。

1980 年 8 月には富士宮市の貿易研修センターで、第 2 回合宿シンポジウムが開催されました。この時はシンポジウム終了後に、ゴルフ・テニス・ハイキングといったレクリエーション・プログラムを追加して、家族同伴も OK としました。前日の金曜日から人が集まり始め、シンポジウムの参加者は 25 名でした。発表のテーマを、①日本の援助体制の問題と調整の必要性、②新しい技術移転方式の模索、③変貌する国際関係への対応、にグループ分けして、活発な討論がなされました。終了後に開かれた盛大な夕食パーティは、会員相互の親睦に大いに寄与しました。合宿型のシンポジウムは 2000 年まで続きました。「第 2 回シンポジウム報告」平木俊一（1980 年 9 月号 No.70）

SRID 婦人クラブ

1984 年 4 月号 No.112 には企画情報担当幹事として「SRID 夫人クラブについて」という囲み記事が掲載されています。その内容は、SRID は従来から（懇談会など）全てのプログラムに夫人同伴の気風があり、自由参加を呼びかけてはいるが、ご夫人方の特技や関心を生かせるようなプログラムはない。そこで「SRID 夫人クラブ」を設立して、国際親善・国際交流を目的とするクラブ活動をしてもらってはどうか。この提案に対して、早くも同年 7 月号 No.116 では藤村建夫会員が、6 月に開催された「SRID 婦人クラブ」設立総会について報告しています。「夫人クラブ」が「婦人クラブ」に改称された理由について、当初は会員の奥様方を念頭に置いていたが、SRID には独身の女性会員もおり、また奥様以外にも入会を希望する女性達がいたから、とのことです。

設立に参加したクラブ会員は 15 名に上り、1984 年度の目標として、懇談会、見学会、会報発行のほか、留学生を家庭に招待する、国際養子制度を支援する、といった国際交流に重きを置いた活動を計画しました。2008 年には平間保枝さんが、9 年間に亘るバングラデシュ・ナラヤンプール村での小学校支援プロジェクトについて報告しています。掘っ立て小屋だった村の学校が 60 万円の寄付で立派な学校に生まれ変わり、教育内容も充実して、2006 年に公立学校に指定されました。「ナラヤンプール村の支援プロジェクト」平間保枝（2008 年 6 月号 No.390）。その後、女性だけの「婦人クラブ」は組織自体が時代に合わなくなり、徐々に活動を停止しました。

サロンの開設

SRIDの活動の原点は会則第3条（目的）に示される通り、内外の開発協力関係者が「互いに専門家として国際的に創造力あふれた活動をするために、励まし、協力し、啓発し合う」ことです。その目的を象徴する場が、毎月第2月曜日に開かれた自由参加形式の「サロン」です。サロンの開設が決まったのは1986年の年次総会で、当初は虎ノ門37森ビルにある「サロン37」を会場として、会員1,000円、非会員2,000円の参加費を徴収。アルコール、オードブルのほか、簡単な食事が出て、貴重な懇親の場を提供しました。「第13回年次総会議事録」（1986年5月号 No.138）。1992年になるとサロンの会場が富国生命ビルの「富国倶楽部」に移り、懇談会・サロンとして合同で開催されるようになりました。

1994年4月号 No.233のお知らせには「研究会のご案内」として、◆ラテン・アメリカ研究会：第3木曜日午後6時半から、◆時事問題研究会：第1木曜日午後6時半から、の記述があります。場所はいずれも三上良悌元会長の自宅、参加費は2000円（食事込み）です。「一木会」と称されたこの研究会が後に「三上サロン」として継承され、三上氏が亡くなる半年前の2018年10月まで続きました。「三上サロン開催報告」黒田次郎（2018年11月号 No.489）

「三上サロン」と併行して、2010年2月に藤村建夫元会長が自宅で「サロン・エカポール」を開設しました。こちらは海外から一時帰国中の会員や外部の専門家をスピーカーに招き、開発協力の最新事情を学ぶことが目的でした。参加費2000円（食事・ワイン込み）で藤村会員が自ら料理の腕を振いました。2020年になるとコロナ禍のためにサロンもオンライン開催となり、写真や水彩画の展示会、ピアノ演奏、釣・トレッキング紀行、仮面収集など、会員の特技や趣味を披露する場となりました。「SRID活動報告：SRIDサロン」山下道子（2022年7月 SRID Journal 第23号）

自主研究会の発足

1987年5月の幹事会で､宍戸寿雄元会長を代表とする自主企画｢経済協力問題研究会｣が発足しました。2 年後の SRID15 周年記念行事の一環として、研究成果の出版を意図しています。研究テーマは、①日本の役割、②日本の経済協力のあり方、③発展途上国の発展能力の分析、④Global View での援助問題、の 4 つです。当時は日本の大幅な貿易黒字が国際問題となり、援助の量的・質的拡大が迫られる状況にありました。「自主企画『経済協力問題研究会』の発足決まる」宍戸寿雄（1987 年 6 月号 No.151）

ランチョン・スピーチ

1991 年 7 月発行の Newsletter 第 200 号記念号では、①私にとって SRID とは何か、②SRID に何を期待するか、という会員への一言アンケートの結果を発表しています。同時に、1991 年度の新規事業として発足した「ランチョン・スピーチ」の第 1 回会合

の報告がありました。この会合の趣旨は、国際開発・経済協力の第一戦でトップの地位にある方々のお話を聞くことです。昼食を共にしながら、その経験と開発経済協力への認識・問題意識をうかがった後、質疑応答を行いました。第 1 回のゲストは海外経済協力基金の西垣昭総裁。この会合は年度内に 9 回開催されました。

地球環境研究会リポート

1993 年 6 月にブラジルのリオで開催された「国連環境開発会議」を前に、有志 11 名が研究会を立ち上げました。議論の過程で、①日本の古船スクラップを鉄鋼原料として再生する、②脱硫装置等の公害防止機器の生産技術を移転する、③社会的循環、環境負荷、生産効率を考えて廃棄物を処理する、といった案が出されました。これらを受けて、①提案の実現性を高めるため、資金手段と優先順位等をリポートに明記する、②地球的視野で環境再生を図る発想をまとめ、SRID から日本政府への要請書として提出する、③各々の職場で実行可能な環境保全対策を推進する、などを確認しました。「地球環境研究会リポート（10 月 24 日）」間島徳次郎（1992 年 1 月号 No.206）

SRID 学生部の設立

1992 年の年次総会において、①若い人の導入による SRID の活性化、②開発関連後継者の育成、を目的として学生部の設立が承認され、1992 年 7 月に発足しました。主な活動は、総会、定期懇談会、ランチョン・スピーチ、夏期合宿といった SRID の関連行事に参加することです。一方、学生部の例会やシンポジウムには SRID の会員も講師として参加し、学生達を指導しました。とりわけ SRID の学生部担当幹事は熱心に活動に関わっています。「特集:SIRD 学生部の紹介」保科秀明（1993 年 5 月号 No.222）「SRID 学生部シンポジウムの速報」加藤かなえ（1994 年 6 月号 No.235）

2003 年以降、学生部は日比谷公園で開催される「グローバルフェスタ」に毎年出展し、活動の紹介や写真の展示などを行って会員の勧誘に努めました。2006～2010 年には参加者を募ってカンボジア、エチオピア、インドでスタディツアーを実施しましたが、勉強会やツアーに参加した学生達の定着率が低く、会員の減少が続きました。一方、関西学院大学総合政策学部に転任した中野幸紀会員の尽力で、2011 年度に SRID 関西学生部が発足し、勉強会やスタディツアーが継承されました。2013 年 3 月に 5 名の会員が上京して SRID シンポジウムに参加し、2012 年 9 月に実施したミャンマーでのスタディツアーについて報告しました。関西学生部の第 4 代代表であった浪川真悠子さんが後年 SRID に入会しました。

2017 年度の年次総会資料によると、2015 年度は学生部のメンバーが 4 年生 5 名、1 年生 3 名となり、4 年生は就職活動のため勉強会などへの参加が困難になりました。2016 年度には 2 年生の三谷宏明氏が学生部代表となり新人の勧誘に努めましたが、最終的に活動に参加するのは 2 名のみとなり、2016 年 6 月以降活動を停止しました。2017 年 3 月に三谷氏より正式に学生部活動停止の申し出を受け、SRID の学生部は廃止さ

れました。「私の大学生活と今後に向けて」佐藤功一（2013 年 5 月号 No.442）はシンポジウムに参加した学生部の佐藤氏が、SRID 会員との交流について記しています。

大来メモリアル・ファンド

1993 年 2 月 9 日に急逝された大来佐武郎名誉会長の意思を継ぐ意味で、SRID として何らかのシンボル的な活動を行いたい、という希望が多くの会員から寄せられました。幹事会で検討した結果、大来氏の情熱を引き継ぐ事業の原資として「大来ファンド」を設立することが決まり、銀行口座を別途開設して、当面 100 万円を目標に会員一人一口 1 万円の募金を受け付けました。基金の原資には手を付けず、その運用益で事業を行うという主旨でしたが、使途を決めずにカネを集めるのはいかがか、利息だけでは大した事業はできない、小さなことでも先生の名において行うことに意味がある、といった意見が出ました。「大来ファンドについて」（1993 年 10 月号 No.227）

2016 年 4 月の年次総会では、藤村元会長が大来基金の繰越金（当時の残高 60 万円弱）を活用して、新規事業「国際協力人材養成事業」（正式名称は「SRID キャリア開発事業」）の設立を提案しています。これまで大来基金の活用について具体的な提案がないまま放置されてきたが、これを SRID のサロン活動に次ぐ、第 2 の柱として事業化したい、としています。事業の内容については、「SRID キャリア開発事業について」中沢賢治キャリア開発事業運営委員長（2016 年 6 月号 No.470）を参照。大来基金はその後、キャリア開発事業を通じて事業費の補填や学生団体支援金として利用されました。

国際協力入門講座

SRID 学生部は 1993 年の創設時より SRID 会員を講師として「学生部懇談会」を開いてきましたが、1995 年 4 月に年 8 回のプログラムとして「国際協力入門講座」を開設しました。本講座の目的は、①これまで国際協力を担ってきた世代が、次世代を担う学生に知識、技術、心を伝える、②国際協力に興味を持っている学生が、現場、実務について理解を深め、将来の国際協力の裾野を広げる、③1 年間のプログラムの成果として報告書を作成する、の 3 点です。講師には、各月にごとに整理した論点に沿って、事例、体験を交えた分かりやすい講義とともに、学生の職業選択に役立つ「職業としての国際協力」についてお話しいただきたい、と注文しています。「国際協力入門講座」SRID 学生部（1995 年 5 月号 No.245）

このプログラムの成果は「国際協力！国際開発！16 人の物語―国際協力入門講座―」（斎藤 優監修、SRID 学生部編）として、1997 年に川島書店より定価 2,200 円で出版される、という快挙を達成しました。16 人の専門家のお話は体験談や人生観など、どのページを見ても教えられることばかりで、特にこれから国際協力・開発を志す若い世代に是非読んでいただきたい、との思いが綴られています。「『国際協力！国際開発！16 人物語』出版のお知らせ」SRID 学生部（1997 年 12 月号 No.273）このように SRID

学生部は国際協力を目指す学生達に支持されてきましたが、2011 年に活動を停止して新設された関西学生部に継承され、その関西学生部も 2017 年 3 月に廃止されました。

Newsletter の編集方針

2000 年 4 月の総会で Newsletter の編集方針に関する議論が行われ、それを踏まえて幹事会で次のような方針を打ち出しました。1 面の企画として年間のテーマを設定し、かつて経験のある「リレー討論」を復活させる。テーマの第 1 候補は「貧困」。2 面、3 面は従来通り自由個別テーマの原稿を 2 本掲載する。自由個別テーマについては今のところ十数件のタイトルが寄せられており、順次執筆をお願いする。4 面は事務連絡。その他の原稿もどんどん掲載していくので、投稿を宜しくお願いしたい。「今年度のニュースレターの方針」広報担当幹事（2000 年 4 月号 No.294）

2001 年 10 月号 No.311 から編集方針が変わり、1 面の上半分に目次と事務的なお知らせを掲載し、その続きの下半分から自由個別テーマの原稿を 1～2 本掲載する、というスタイルになりました。はっきりした理由は不明ですが、おそらく広報担当幹事がいなくなり、事務局の負担を軽減するためと思われます。囲み記事として幹事が持ち回りで執筆していた「談話室」などの軽い読み物がなくなり、事務局からのお知らせも事務的になるなど、単調な紙面になりました。「会員の窓」に当たる「会員レポート」も徐々に会員からの投稿がなくなり、またプライバシーの観点から、会員の住所や職場情報の記載を廃止しました。

大震災復興計画タスクフォース

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は SRID にも大きな衝撃を与えました。2011 年 4 月の総会では、年会費の剰余金から日赤を通じて 50 万円を被災地に寄付することが決まりました。高橋一生元会長の音頭で、震災復興計画に SRID の知恵を集めて提言することを目的にタスクフォースが設置され、12 名が参加。提言の「総論」は Journal の創刊号に掲載されました。「ポスト 3.11 の開発協力：地球公共財形成への重点シフト（FGPG?）」高橋一生（2011 年 7 月 SRID Journal 創刊号）。「特集：第 2 回歴史懇談会（震災復興計画 TF2 スタート会合）」小林一（2011 年 5 月号 No.424）

SRID フォーラムの発足

1979 年 8 月に始まった合宿形式の夏期シンポジウムは、2001 年から 1 日かけて会議室で開催されるようになり、2016 年 3 月まで続きました。2018 年度になると神田道男元会長の主導で、「シンポジウム」がより内容にふさわしい「フォーラム」と名を変えて再開され、会員による研究発表とパネル討論が復活しました。2019 年度以降はハイブリッド開催となったため、海外在住の若手会員が研究発表に加わりました。「第 5 回 SRID フォーラム報告」神田道男（2023 年 4 月号 No.528）

おわりに

初めに書いた通り、2011 年当時は SRD Homepage が開設され、SRID Journal が創刊される中で、SRID Newsletter も装いを一新させ、色付きの見違えるほどスマートな紙面となりました。さらに 2016 年にキャリア開発事業が創設されて、国際機関・国際 NGO などを志望する若者に、本格的・実践的な研修を提供するようになりました。往年の自主企画・自主研究を復活させて、新たに会員有志による「勉強会」を開設し、外部に発信しようという動きも出ています。これらはすべて Newsletter でフォローされていますので、関心のある会員は会員専用のブログ「会員エリア」にアクセスして、2009 年度以降の Newsletter を検索してください。